

<前回>オリエンテーション

後期：キリスト教と経済・環境

後期オリエンテーション

3. 自然神学の拡張と社会科学

4. キリスト教思想と経済・環境

4-1：キリスト教思想から見た環境と経済

4-2：聖書と環境思想

4-3：聖書と経済思想

4-4：現代神学の動向から

1：プロセス神学

2：政治神学（省略、あるいは水3の特殊講義にて講義）

3：科学技術の神学

<前回>プロセス神学

A. 導入

「4-1：キリスト教思想から見た環境と経済」で、キリスト教思想において「環境と経済」をテーマ化した具体例として、カブを取り上げ、講義の問題設定を行った。

1. John B. Cobb Jr., *Postmodernism and Public Policy. Reframing Religion, Culture, Education, Sexuality, Class, Race, and the Economy*, State University Press of New York Press, 2002.
2. John B. Cobb, Jr., *Christianity, Economics, and Ecology*, in: Dieter T. Hessel and Rosemary Radford Ruether (eds.), *Christianity and Ecology*, Harvard University Press, 2000.

↓

3. 講義の問題設定

- ・環境と経済・政治とは一つの問題系を構成している。キリスト教思想研究は、問題系の再確認から議論を再構築する必要がある。そのための基礎理論としての自然神学の再考。倫理的設定では射程が狭い。
- ・キリスト教思想の根本へ、そこから議論を構築すること。つまり、聖書解釈が争点となる。
- 4. カブの議論の思想的基盤にはプロセス神学が存在する（下線部！）。今回は、このカブの背後にあるプロセス神学のポイントをホワイトヘッドに遡って解説する。

B. ホワイトヘッドとプロセス神学1. ホワイトヘッド哲学へのアプローチ

* Alfred North Whitehead, 1861-1947：数学基礎論から科学哲学、そして形而上学へ

< Process and Reality >

<基本命題>

- ① Speculative Philosophy is the endeavour to frame a coherent, logical, necessary system of general ideas in terms of which every element of our experience can be interpreted. (5)
- ② The true method of discovery is like the flight of an aeroplane. It starts from the ground of particular observation; it makes a flight in the thin air of imaginative generalization; and it again lands for renewed observation rendered acute by rational interpretation. The reason for the success of this method of imaginative rationalization is that, when the method of difference fails, factors which are constantly present may yet be observed under the influence of imaginative thought. (7)

<形而上学の方法＝一般化の方法>

(1)より高次の一般性へ（終わりなき前進とそのつどの定式化の試み）

経験の事実によって前提とされる一般的観念、自明性を越える

形而上学的志向性（全体へ、宗教と科学）

(4) 枠組みの構築と想像力、訓練された本能 (5) 知の体系性

2. ホワイトヘッドの形而上学の枠組み

2-1: プロセスとしての現実的存在

① 現代科学の实在理解とその一般化

② 一切の实在は相互作用連関の内にある

actual entity (the final real thing) / the 'principle of relativity'

③ 現実的存在の構造：現実態は両極的である

④ 現実的存在の時間構造：時空的連続体としての現実的存在

⑤ 現実的实在はプロセスである（自己創造を通じた世界創造）

・ 自己創造的プロセス・有機的プロセス（合成 concrescence）＝世界の形成過程への寄与
創造性 (Creativity)、神、永遠的客体 (eternal objects)

・ 生成から存在へ：現実的存在の三重の性格

1. 過去の世界によって与えられたという性格

抱握 (prehension)：客体に関心 (concern) を持つこと、感取 (feeling)

2. 因果的に限定されながら、ある目的観念を未来において実現するという性格

合生過程：自己原因的、主体

満足 (satisfaction)：主体的目的に実現

3. 後続する現実的存在に対して自らを客体的存在として与える

自らを超え出て自らを他者に与える：surperject（自己超越体）

因果的に客体化される、存在となる

1. 3：他との連関・連帯、2：個としての自由・自己原因

⑥ 感取と決断

⑦ 主体的目的 (the subjective aim)：強制力として作用するのではなく、促し・誘因となる

2-2: 現実的存在の系列・社会

(1) 持続とエポック的時間

(2) 系列と社会、秩序、永遠的客体

(3) 外延的連続体：世界の創造的前進の根底に横たわっている

3. ホワイトヘッドと宗教

(1) 宇宙論的構図（目的論的な世界の創造過程）：自然科学から一般化→形而上学

この枠組み内に、宗教はいかに位置づけられるのか

創造性／神／永遠的客体／外延的連続体

目的因／作用因／形相因／質料因

(2) 神の本性の三重性

1. 神も一つの現実的存在である

In the first place, God is not to be treated as an exception to all metaphysical principle, involved to save their collapse. He is their chief exemplification. (405)

2. 神の本性の三つのアспект（一つの現実的存在としての全体的な神の、相互に独立で相関した仕方）：原初的本性、結果的本性、自己超越的本性

原初的本性：概念的抱握

結果的本性：自然的抱握

三重の本性：神は世界に依存し、世界から独立であり、世界に働きかける

① 原初的本性（「神から世界へ」1－働きかけ・誘因）

3. 永遠的諸客体とそれを現実化する現実的存在との関係性

永遠的客体と外延的連続体から時空的連続体・現実的存在の社会の形成という観点での神の役割、形相によって質料を限定し、現実の世界を構築する

5. 最初の主体的目的を供給、説得的誘因 (persuasive lure)

現実的存在の合生過程を導いてゆくのが、神の原初の本性から直接導き出される主体的目的、理想的な完全性の実現への衝動

②結果的本性（「世界から神へ」）

展開する宇宙の諸現実的存在の神による自然的抱握

神の本性は世界の創造的前進の結果としてある。

神による世界の自然的抱握は選択的であり、あるものは消極的抱握を通して神から排除される（＝神の審判）

③自己超越的本性（「神から世界へ」 2－世界への内在）

神が自らを後続する現実的存在に与件として与えること

ホワイトヘッドの神の特徴

↓

(3) 神と世界の逆対応

神と世界の逆対応ともいうべき力動的な関係

神に関しては原初の本性が優先、他の現実的存在の場合は過去によって与えられたという性格から出発。神は能動から受動へ、世界は受動から能動へ展開する

(4) 万有在神論（ハーツホーン）

(5) コメント

- ・三位一体論との関わり、なぜ神は人格的でなければならないのか？

哲学者の神：形而上学的な神論

科学と神的原理との関連性は議論できているが、しかし、それは宗教的神あるいは神学とどのような連関にあるのか

- ・キリスト教、ギリシャ、仏教などの諸思想との関わり

4. プロセス神学とキリスト教思想

(1) ホワイトヘッドの神論とその意味 → キリスト教と自然科学、キリスト教と仏教

(2) キリスト教思想にとっての意義－プロセス神学－

1. 存在論とキリスト教思想

2. プロセス神学：ホワイトヘッド形而上学の概念枠によるキリスト教思想の構築

Charles Hartshorne (1897-2000), John B. Cobb, David Ray Griffin, Lewis Ford

①ホワイトヘッドの神 → 宗教の神へ ②「科学と宗教」→ 新しい有神論の定式化

3. Charles Hartshorne, *A Natural Theology for Our Time*, Open Court 1967

(Ch.ハーツホーン『自然神学の可能性』行路社。)

(3) プロセス神学の意義

A forest is the triumph of the organisation of mutually dependent species.

Every organism requires an environment of friends, partly to shield it from violent changes, and partly to supply it with its wants. The Gospel of Force is incompatible with a social life. By force, I mean antagonism in its most general sense.

Almost equally dangerous is the Gospel of Uniformity. The differences between the nations and races of mankind are required to preserve the conditions under which higher development is possible. (Whitehead, 1925, 206-207)

4－4：現代神学の動向から3：科学技術の神学

(1) 「科学技術の神学」に向けて、問題点・論点

深刻かつ緊急の問い → 根本から考察を行う必要がある。

1. キリスト教の多様性：「キリスト教」という名称で分類される多様な立場や現象につ

いて、いかなる仕方で、たとえば「キリスト教から見た科学技術論」といった議論を行うのか。キリスト教を論じる起点をどこに設定するのか。特定教派や特定の思想家が、キリスト教という議論を単純に代表できないことは明かである。

2. 科学技術の多様性：科学技術についても、キリスト教の場合と同様の多様性が存在する。古代と現代とを「科学」「技術」として論じることは可能か、可能としてもそれはいかなる仕方においてか。また、原子力、iPS 細胞などの遺伝子工学、人工衛星といった多岐にわたる科学技術についていかなるアプローチをするのか。

フクシマ・3.11 と原発事故という前提で。

3. 科学技術の基本性格とは何か。科学技術は人間存在にとって何なのか。人間の条件と現代の科学技術との関わりをどうとらえるか。
4. 現代においては特に、科学技術は、自然科学の分野の事象であると同時に、経済的また政治的な事象でもある。その科学技術の実態をいかに理論的に把握するのか。環境と経済を自然神学という視点から統合的に捉えるという試み。
5. キリスト教は科学技術といかなる関係を構築すべきか。それを具体化するにはいかなる必要があるか。
6. 神の創造・贖いの働きは、人間の科学技術の営みといかなる関係にあるのか。神が全知全能で、善なる行為的存在であるとすれば、人間の営みは神の働きと無関係ではないはずである。

(2) 科学技術と人間存在の両義性

聖書の創造物語と存在論 (ティリッヒ)

1. 聖書テキストから

創世記 1：神の像・支配

有限性 1 = 善

創世記 2：土の塵・耕す・命名

有限性 2 → 科学技術

創世記 3：墮罪

疎外・歪曲

↓

生の両義性

本質存在と実存存在

2. 人間存在 (われ／われわれとしての人間) から科学技術へ

人間存在の両義性 → 科学技術の両義性、原発／iPS

原子力：兵器と原発、平和利用？

3. 光：iPS

原初の人アダム＝農民

耕す／名づける → 科学技術の原型、文明の肯定

4. 影：原発

『人間の条件』(アーレント) のレベルでの変化→文明批判、バベル神話

転倒の可能性と現実性 → 批判的監視者の必要性、

＝キリスト教の科学技術への関わり方 1

5. 神の創造行為の器としての科学技術

「創造された共同創造者」(the created co-creator)

進化のプロセスと通して、人間の歴史的営みを通して神が創造行為を継続する。人間はその共同創造者である。

神の愛は人間の行為のチャンネルを通して実現する (賀川豊彦)

→ 科学技術の良き理解者、協力者＝科学技術への関わり方 2

6. 科学技術へのキリスト教の関わりを責任あるものとする前提

・自然神学の再構築

・キリスト教内の科学者との共同作業を行う場の形成

7. 現時点での原発問題に対して。人類は核廃棄物を解決できるか。
しかし、人間に原理的断定をすることが可能か？

（3）文献

1. ハンナ・アーレント『人間の条件』ちくま学芸文庫。原著1958年。

「一九五七年、人間が作った地球生まれのある物体が宇宙めがけて打ち上げられた。この物体は数週間、地球の周囲を廻った」、「重要性からいえば、もう一つの出来事、核分裂にも劣らぬこの事件」(9)

「地球は人間の条件の本体そのものであり、おそらく、人間が努力もせず、人工的装置もなしに動き、呼吸のできる住家であるという点で、宇宙でただ一つのものであろう」、「このところずっと、科学は、生命も「人工的」なものにし、人間を自然の子供としてその仲間に結びつけている最後の絆を断ち切るために大いに努力しているのである。たとえば試験管の中で生命を造ろうとする企てがある」、「ここに現われているのは、地球の拘束から逃れたいというのと同じ欲望である。また、人間の寿命を百歳以上に伸ばしたいという希望にもやはり、人間の条件から脱出したいという望みが隠されているのではないかと思われる」(11)

「賜物」「この与えられたままの人間存在に対する反抗」、「問題は、ただ、私たちが自分の新しい科学的・技術的知識を、この方向に望むかどうかということであるが、これは科学的手段によっては解決できない。それは第一級の政治的問題であり、したがって職業的科学家や職業的政治屋の決定に委ねることはできない。」(12)

「これから私がやろうとしているのは、私たちの最も新しい経験と最も現代的な不安を背景にして、人間の条件を再検討することである。」(15)

2. ティリッヒ「宇宙探検が人間の条件と態様に対して与えた影響」(1966(1963))

「一つは、宇宙探検が人間そのものに与える影響、もう一つは、宇宙探検が人間の自己理解に与える影響」(42)

「ルネサンス以降の時代、宗教改革や啓蒙主義の時代に見出されたような、水平線、すなわち神や人への奉仕のわざにおいてコスモスを支配し変革しようとする傾向。「水平線の発見」は、宇宙探検が現時点における最新の第一歩であるような発展の最初の第一歩である。両者はともに、円環と垂直線に対する水平線の勝利であった」(44)

「それは、十八世紀的な人間的進歩への信仰の中に、また、十九世紀的な世界的進歩への信仰の中にもここ三世紀の工業的・社会的・政治的諸革命を支える諸理念への信仰の中にも内在している水平線の中で展開され続けた」(45)

「人間と地球とが宇宙の中心から追い出されたことに関連する衝撃の一つは、本質的に神学的なものであった」「神の摂理のわざにおいて人間の占める位置はどうなるのか？ 宇宙全体の中でキリストの宇宙的意義はどうなるのか？ 地球が中心から外れていくことは、人間の中心的意義とキリストの宇宙的意義とを切り捨てることにならないだろうか？」(46)

「地球の引力圏を突破したことに対する最初の反応は」「驚きと賞賛と自尊心とであった」(46)

「彼らはシンボルとなり、人間実存の新たな理想像の形成に決定的な役割を果たしたのである」(47)

「地球を超越するイマジネーション」(48)

「人間の不安感は、詩篇第八篇の時代以来、支配する力の中で自尊心とバランスをとっていたのだが、支配する力の増加とともにかえって増加してきたのである。この不安の理由

の一つは、人間の偉大さも卑小性も究極的に超越したもの——パスカルと詩篇によって問われている、人間の悲惨な状況に対する答え、の喪失である。もう一つの理由は、より特殊な理由であり前述の二者においては知られていなかったことであるが、人間は自分の所有している支配力を、人類の一部だけでなくそのすべてを絶滅させるためにも用いることが出来るという事実である」、「この影は兵器の開発と宇宙探検が互いに結びあわされている限りなくなることはないであろう」(49)

「宇宙への飛び立ち、そして地球を眼下に見下ろす力を得たことの結果の一つは、一種の人間と地球との間の疎外、人間が地球を対象化(objectification)したことであつた。つまり、「母なる大地」から「母なる」という性格を奪ったこと」、「大地の非神秘化」(50)

「結局「何のために？」という根源的な問いへと帰着する」、「その目的は前進のための前進であり、終わりがなく、具体的な焦点もない」、「前進主義」、「あらゆる意味ある満足の喪失と完全なる空虚さ」(51)

「科学者の、彼のなす新発見の中に含まれている危険な可能性に対する責任の問題である」(52)

「科学が、人間がそこにおいて聖書の文書や教会の教えの中に自身の姿を見出して来た宇宙的枠組みを切り捨ててしまったことは疑問の余地がない」(53)

「宇宙探検は人間の宗教的自己理解の宇宙的枠組みを途方もないほどの仕方を変えてしまった、と言えるかもしれない」(54)

「経済的な問い」(55)

「「必要性の優先順位」」(56)

「宇宙探検の持つ社会的な含蓄によって強められる衝突」、「宇宙探検は、我々の時代の全世界的な風潮に大きな影響を及ぼしている」、「専門家集団の成長」、「知識人の貴族政治」(57)

3. Ronald Cole-Turner, *The New Genesis. Theology and the Genetic Revolution*, Westminster/John Knox Press, 1993.

6. Participating in the Creation

When we participate in redemption, we respond in compassion to that which is suffering and broken. When we participate in creation, we assist the unfolding of new dimensions of existence. this technology must be seen in relationship both redemption and creation.

We begin by considering the suggestion ... that technology be thought of as co-creation --- that is, as human cooperation in creation. (98)

Jürgen Moltmann has extended the idea of *creatio continua* to include the hope of a *creatio nova*, a new creation that is the consummation of all God's creative and redemptive acts.

Philip Hefner ... argues that we should think of ourselves as created co-creators

Arthur Peacocke (100)

science and technology serve God's ongoing creative work.

several difficulties

First

While science is certainly capable of understanding something about nature, it is quite another thing to claim that science is capable of discerning the purposes of the Creator.

(101)

Redemption provides the necessary noetic clue to the interpretation of scientific insight. We see the purposes of God more clearly when look at how God restores nature than when we look at nature itself.

second ... the ambiguity inherent in the prefix. 'co-'

Karl Barth

It does not mean that he becomes a kind of co-God.

Third ... an inherently optimistic assessment. Such an assessment fails to recognize the disorder of nature

our technology ... is constantly on the edge of sin, exploitation, and greed. (102)

two major change

creation be jointed with redemption

to call attention to the metaphor implicit in the idea of co-creation and to explore the logic of this metaphor more fully

Dramatically and explicitly, Yahweh is the first gardener. Gardening or agriculture is a metaphor for creation itself. (103)

metaphor, three point

When we picture God working through a specific technology, we confer a value and a legitimacy upon that technology.

if we believe that God works through this technology, then we want our purposes to coincide with God's purposes.

"Unless the Lord builds the house, those who build it labor in vain"(Psalms 127:1, RSV). Only when we can recognize the activity of God in our human work is it proper for us to proceed. (106)

Rarely have recent theological and liturgical writers connected God and technology. This silence reinforces the notion that modern technology is alien to God, perhaps even God's enemy or a demon.

The technologies of our age are pursued without reference to God, and there is no theological foundation upon which we can see technology or science as a Christian vocation.

References to today's technologies are largely absent from liturgy, sermons, and theological literature.

This lack of familiarity makes the theological task not only more difficult but also more urgent.

If the Yahwist could say that God planted a garden, can we not say that God engages in genetic engineering? (107)

An affirmative answer is consistent with the convictions of the Christian tradition through the centuries. It represents an important and decisive expansion of this traditional perspective, but it is not inconsistent with it. It has always been part of the Christian tradition to affirm that God works through the creation, using all natural processes and the activities of human to extend that divine activity in the creation.

It is also an affirmation that our genetic engineering has the potential for being an extension of the work of God. ... It expands the reach of God's action, placing a new mode of contact, through our technology, between the Creator and the creation. ... placing new instruments, namely their technical skill, into the hands of the Creator. (108)

By continually creating new forms and new realities, God is continuing to unfold the evolution of the universe and the evolution of life on our planet. There is no limit to the possibilities of what God may yet create.

must it not be said that genetic engineering is an extension of God's activity? (109)

4. 賀川豊彦『友愛の政治経済学』日本生活協同組合連合会、2009年。

Toyohiko KAGAWA, *Brotherhood Economics*, Harper & Brothers, 1936.

「III 十字架の愛と経済の価値」：「もしも私たちが神に帰依し、手足を動かすことを拒み、それでいて神は私たちを助けてくださるだろうと信じているとすれば、それは迷信以外の何ものでもない。結局のところ、信仰とは神による可能性を信じることである。この可能性を信じることでそれ自体が人間の活動を要求する」、「神の呼び起こされた愛の結果」(45)、「愛は人間のチャンネルを通して流れ出る神の働きなのである」、「贖罪愛は全体的な意識、即ち神意識から出る。だから、神より来るものである。この愛は、人間の意識のチャンネルをとおして流れ出るが、神の意図に従っている」、「愛の可能性への信仰」、「私たちが私たち自身をとおして神に働いてもらうようにするのでなければ、神ご自身もその可能性を実現することはできない。」(46)

5. 金承哲『神と遺伝子——遺伝子工学時代におけるキリスト教』教文館、2009年。

第3部 「神を演じる」をめぐる3つの立場と脱中心的人間

第5章 「神を演じてはならない」

第6章 「神を演じているのか」

第7章 「神を演じよう！」

「神の活動の延長として捉える」「神が参与する遺伝子工学」と命名」

「神は、遺伝子的変化を成すために、自然的過程を通じて働く。神は、意図的な遺伝子的変化を成すために、人間を通じて働く」(163)

「神の創造活動に協力する」「継続的創造」「共同創造者」「私たちは、単に造られた『共同創造者』であるだけでなく、同時に、絶えず救済の必要性を感じる被造物でもある」

「創造された共同創造者」「フィリップ・ヘフナー」(164)

「自然はもともと善なるものであるがいまは歪曲されている」という事柄を表明するものとして非神話化され再解釈されるべきである」(165)

罪論におけるエイレナイオス・タイプの議論を入れるどうなるか？

「遺伝子工学はキリスト教的召命(vocation)、あるいは天職(calling)として勧められる」(166-167)

「遺伝子工学の目標は、治癒し、取り戻し、保護し、そして探求することであらねばならない」「神への奉仕」(service of God)」(167)

「自然は、倫理的行為のための完璧な指針を提供する場所ではなく、より完全な状態に向かって変化しつつある、未完成の場である。コール＝ターナーの自然観は、自然の無計画性と未完結性を強調する」「自然主義的誤謬を乗り越えている」(168)

「生命工学の恩恵を均等に配分することの重要性を強調」(168-169)

「人類共同体の中で最も弱く貧しい構成員をどのように扱うかによって、道徳的進歩が測られる」「テクノロジーからの利益は、それをもっとも必要とする人びとが利用できるようになる」(169)